

1.	食道は、喉もとから上腹部のみぞおち近くまで続く、直径1～2cmの管状の器官で、消化液の分泌腺がある。
2.	大腸の腸内細菌は、血液凝固や骨へのカルシウム定着に必要なビタミンKを産生している。
3.	鼻腔から気管支までの呼気及び吸気の通り道を気道といい、そのうち、咽頭・喉頭までの部分を上気道という。
4.	ネフロンは、腎小体と尿細管とで構成される、腎臓の基本的な機能単位である。
5.	視細胞が光を感じる反応には、ビタミンDが不可欠であるため、ビタミンDが不足すると夜間視力の低下（夜盲症）を生じる。
6.	においに対する感覚は順応を起こしにくく、長時間同じにおいを嗅いでいても、そのにおいをいつまでも鋭敏に感じる。
7.	一般に、消化管からの吸収は、濃度の高い方から低い方へ受動的に拡散していく現象である。
8.	加齢等により皮膚のみずみずしさが低下すると、塗り薬の有効成分が浸潤・拡散しやすくなる。
9.	一般的に、軟膏剤とクリーム剤では適用部位を水から遮断したい場合にはクリーム剤を用いることが多い。
10.	ペプシノーゲンは、胃酸によって主に炭水化物を消化する酵素であるペプシンとなり、胃酸とともに胃液として働く。
11.	肺の内部で気管支が細かく枝分かれし、末端はブドウの房のような構造となっており、その球状の袋部分を肺胞という。
12.	女性は尿道が短いため、細菌などが侵入したとき膀胱まで感染を生じやすい。
13.	表皮は、線維芽細胞とその細胞で産生された線維性のタンパク質（コラーゲン、フィブリリン、エラスチン等）からなる結合組織の層である。
14.	喘息は、合併症を起こさない限り、原因となった医薬品の有効成分が体内から消失すれば症状は寛解する。
15.	副腎皮質ホルモンの一つであるアルドステロンは、体内にカリウムと水を貯留し、塩分の排泄を促す作用があり、電解質と水分の排出調節の役割を担っている。
16.	膀胱の出口にある膀胱括約筋が緩むと、同時に膀胱壁の排尿筋が収縮し、尿が尿道へと押し出される。
17.	カプセルの原材料として広く用いられているゼラチンは、ブタなどのタンパク質を主成分としているため、ゼラチンに対してアレルギーを持つ人はカプセル剤の使用を避けるなどの注意が必要である。
18.	ショック（アナフィラキシー）は、生体の異物に対する遅延型アレルギー反応の一種である。
19.	白血球は、好中球、リンパ球、単球等からなり、そのうちリンパ球が白血球の約60%を占めている。
20.	喉頭の後壁にある扁桃は、リンパ組織が集まってできていて、気道に侵入してくる細菌、ウイルス等に対する免疫反応が行われる。
21.	唾液は、酸による歯の齶蝕を防いでいる。
22.	副腎髄質では、自律神経系に作用するアセチルコリンが産生・分泌される。
23.	腎臓には、心臓から拍出される血液の1/5～1/4が流れている。
24.	男性では、加齢とともに前立腺が萎縮し、尿道を圧迫して排尿困難等を生じることがある。
25.	主に水晶体の厚みを変化させることによって、遠近の焦点調節が行われており、水晶体は、近くの物を見る時には丸く厚みが増し、遠くの物を見る時には扁平になる。
26.	腭液は、弱アルカリ性であり、胃で酸性となった内容物を中和している。
27.	強膜（白目の部分）が充血したときは、眼瞼の裏側が赤くなる。
28.	尿は血液が濾過されて作られるため、健康な状態であれば細菌等の微生物は存在しない。
29.	交感神経系が活発になっているとき、瞳孔は収縮する。
30.	眼球は、6本の眼筋が眼球側面の強膜につながっており、上下左右斜めの各方向に向けることができる。
31.	硝子体は、その周りを囲んでいる毛様体の収縮・弛緩によって、近くの物を見る時には丸く厚みが増し、遠くの物を見る時には扁平になる。
32.	交感神経系が活発になっているとき、気管支は収縮する
33.	偽アルドステロン症とは、体内にナトリウムと水が貯留し、体からカリウムが失われることによって生じる病態である。
34.	皮膚粘膜眼症候群（スティーブンス・ジョンソン症候群）の症例の多くが中毒性表皮壊死融解症（TEN）の進展型とみられる。
35.	間質性肺炎は、肺の中で肺胞と毛細血管を取り囲んで支持している組織（間質）が炎症を起こしたものである。
36.	副腎皮質では、自律神経系に作用するアドレナリン（エピネフリン）とノルアドレナリン（ノルエピネフリン）が産生・分泌される。
37.	無菌性髄膜炎は、医薬品の副作用が原因の場合、早期に原因医薬品の使用を中止すれば、速やかに回復し、予後は比較的良好であることがほとんどである

38.	接触皮膚炎は医薬品が触れた皮膚の部分にのみ生じ、正常な皮膚との境界がはっきりしているのが特徴である。
39.	嚥下の際には、喉頭の入り口にある喉頭蓋が反射的に開くことにより、飲食物が食道へと送られる。
40.	チュアブル錠は、口の中で舐めたり噛み砕いたりして服用する剤形であり、水なしでも服用できる。
41.	鼻汁は、鼻腔の内壁にある粘液分泌腺から、かぜやアレルギーのときの防御反応としてのみ分泌される。
42.	心臓から拍出された血液を送る静脈は弾力性があり、圧力がかかっても耐えられる。
43.	咽頭は鼻腔と口腔につながっており、消化管と気道の両方に属する。
44.	汗腺には、エクリン腺とアポクリン腺の二種類があり、エクリン腺は体臭腺である。
45.	脊髄は脊椎の中にあり、脳と末梢の間で刺激を伝えるほか、末梢からの刺激の一部に対して脳を介さずに刺激を返す場合があり、これを脊髄反射と呼ぶ。
46.	骨の成長が停止すると骨吸収と骨形成は行われず、カルシウムが骨から溶け出し骨密度は低下する。
47.	骨格筋の疲労は、乳酸の代謝に伴って生成するグリコーゲンが蓄積し、筋組織の収縮性が低下する現象である。
48.	脳は、細胞同士が複雑かつ活発に働くため、酸素の消費量は全身の約50%を占める。
49.	黄疸とは、「ビリルビン（黄色色素）」が胆汁中へ排出されず血液中に滞留することにより生じる。
50.	口腔内崩壊錠は、口の中の唾液で速やかに溶ける工夫がなされた剤形であるため、水なしで服用することができる。

2章 ○×-2 こたえ

番号	解答	解説(×のみ)
1	×	食道に消化液の分泌腺は「ない」。
2	○	
3	○	
4	○	
5	×	ビタミンDではなく、「ビタミンA」
6	×	においに対する感覚は鋭敏だが順応を「起こしやすい」ため、長時間同じにおいを嗅いでいると次第にそのにおいを「感じなくなる」。
7	○	
8	×	皮膚のみずみずしさが低下すると、塗り薬の有効成分が浸潤・拡散「しにくくなる」。
9	×	部位を水から遮断したい場合には「軟膏剤」、患部を水で洗い流したい場合には「クリーム剤」を用いる。
10	×	炭水化物ではなく、「タンパク質」
11	○	
12	○	
13	×	表皮じゃなくて、「真皮」
14	○	
15	×	副腎皮質ホルモンの一つであるアルドステロンは、体内に「塩分」と水を貯留し、「カリウム」の排泄を促す作用があり、電解質と水分の排出調節の役割を担っている。
16	○	
17	○	
18	×	遅延型ではなく、「即時型」
19	×	好中球は白血球の約60%、リンパ球は「約1/3」、単球は「5%」を占めている。
20	×	喉頭ではなく、「咽頭」
21	○	
22	×	アセチルコリンではなく、「アドレナリン(エピネフリン)とノルアドレナリン(ノルエピネフリン)」。
23	○	
24	×	委縮ではなく、「肥大」
25	○	
26	○	
27	×	強膜の充血は、眼瞼の裏側は「赤くならず」、白目の部分がピンク味を帯びる。(「結膜」の充血は白目の部分だけでなく眼瞼の裏側も赤くなる。)
28	○	
29	×	瞳孔は「散大」する
30	○	
31	×	硝子体ではなく、「水晶体」
32	×	気管支は拡張する
33	○	
34	×	「中毒性表皮壊死融解症(TEN)」の症例の多くが「皮膚粘膜眼症候群」の進展型とみられる。
35	○	
36	×	副腎皮質ではなく、「副腎髄質」
37	○	
38	○	
39	×	開くではなく、「閉じる」
40	○	
41	×	鼻汁は常に少しずつ分泌されている。
42	×	静脈じゃなくて「動脈」
43	○	
44	×	「アポクリン腺」が体臭腺。
45	○	
46	×	骨は、骨の成長が停止した後も「一生を通じて」骨吸収と骨形成が行われる。

47	×	乳酸とグリコーゲンが逆
48	×	約50%ではなく、約「20%」。
49	○	
50	○	